Kumārila の bhāvanā 説について (2)

黒　田　泰　司

Kumārila の bhāvanā 説は，そのすべてが彼の創案によるものでなく，彼以前に存在していた何らかの教説の上に築き上げられたものである。TV の議論を詳細に検討する時，我々はある程度まで，彼が新たに付加したものは何か，また旧来の説に歩調を合わせているのはどの部分かを推定することができる。

前回，新たに付加されたものとして bhāvanā の証明法を取り上げ，その特色を考察した[1)]。今回取り上げるのは，bhāvanā を表示する部分をめぐる議論であるが，ここでは旧来の説に妥協していることが分かる。

I. さて，その問題を考察する前に，予め注意しておかなければならないことがある。それは，bhāvanā の議論に頻出する "ākhyāta" という語の解釈である。解釈しにくい一例として，Bhaṭṭa 派の有名な綱要書 AS の記述を挙げてみよう[2)]。

AS, p. 2, *ll.* 2–7; yajetety atrāsty aṃśadvayaṃ, yajidhātuḥ pratyayaś ca/ pratyaye'py asty aṃśadvayam, *ākhyāta*tvaṃ liṅtvaṃ ca/ tatr*ākhyāta*tvaṃ daśalakārasādhāraṇaṃ, liṅtvaṃ punar liṅmātre/ ubhābhyām apy aṃśābhyāṃ bhāvanaivocyate/ (一文省略)/ sā dvidhā——śābdī bhāvanā, ārthī bhāvanā ceti/

次に，本邦で参照されることの多い北川秀則博士の和訳を示そう[3)]。

「yajeta というこ〔の語〕には二つの部分が存する。yaj という語根と〔ta という〕接尾辞とである。〔ところでこの ta という〕接尾辞にも亦二つの部分が存する。動詞の語尾としての部分と願望法の語尾としての部分とである。この中動詞の語尾としての部分の方は十の時・法に共通であるが，願望法の語尾としての部分の方は願望法にのみ属する。〔ta という接尾辞に属するこれら〕二つの部分は，ともに志向（bhāvanā）のみを示す。（一文省略）これに二種ある。依言志向（śābdī bhāvanā）と依果志向（ārthī bhāvanā）とである。」

要するに，liṅ が śābdī-bhāvanā を，ākhyāta が ārthī-bhāvanā（以下，単に bhāvanā と記す時はこちらを指す）をそれぞれ表示するということを，yajeta という動詞の語尾の中に見出そうとしているのであるが，上の和訳のように "ākhyāta" という語を「動詞の語尾」と解釈すれば，文意は明快なものとなる。しかしながら，"ākhyāta" という語は，動詞語根と動詞語尾の両方を備えた「動

詞 (動詞形)」を指すのが普通である。もちろん動詞語尾も動詞の一部であるから，そのつもりで "ākhyāta" という語を用いたとも考えられるが，それならどうして直前で用いられた "pratyaya" という語を使わないのであろうか。

AS の記述は，これから検討する Kumārila の主張にまで遡らなければ解決できないように思われる。この研究では，"ākhyāta" という語は常に「動詞」と解釈することとし，文脈に応じて「動詞の語尾」と解釈することは避けている。Kumārila は，「動詞の語尾」を意味する場合には "pratyaya" もしくは "ākhyātapratyaya" という語を用いているからである。

II. bhāvanā についての詳細な考察は TV ad JS II. 1. 1 において為されているが，その表示部分に関しては，ŚV, vākyādhikaraṇa 章からも手掛かりが得られる。まず，それを見ておきたい。

(1) anvayavyatirekābhyāṃ pratyayārthas tu seṣyate// 248 cd
kaiś cid (2) anyais tu dhātvarthas tatsāmīpyopakārataḥ/

(3) aparaiḥ samudāyārthas tata eva hi gamyate// 249
pākādau yan na dṛṣṭāsau bhavatyādau tathaiva ca/

(4) vivekaphalamandatvāt pacatyādau yatheṣṭatā// 250

(1) は，"yajati" のように動詞語尾が付けば bhāvanā が理解され，"yāga" のように付かない時は理解されないことから，動詞語尾が bhāvanā を表示するという説，(2) は動詞語尾が付くという条件下での動詞語根，(3) は動詞語根と語尾の合わさつた全体 (ただし "bhavati" などの動詞は除く) が表示するという説。以上三つの主張を紹介した後，Kumārila は (4) で，表示部分を特定するのは無意味だとして，この点について断言するのを避けている。結局，動詞から bhāvanā が理解されるという事実だけが彼の教説にとつて意義を有すため，それ以上の詮索には消極的な態度を取つたのであろう。

III. 表示部分をめぐる TV の議論は bhāvanā の証明に続いて行われるが，大きく二つに分けられる。

A.....TV, p. 345, *l.* 12–p. 347, *l.* 3

B.....TV, p. 347, *l.* 3–p. 349, *l.* 12

A の立場は，bhāvanā の表示部分を特定せず，単に動詞から理解されるとするもので，ŚV の立場と同じものである。ただし，動詞語尾のみが bhāvanā を表示するとする立場がはつきりと批判の対象になつている点が異なる。また，"bhavati" などの動詞には bhāvanā を認めていない。

B の立場は，それとは逆に，bhāvanā の表示部分を動詞語尾に特定するものである。この立場では，同じ動詞語尾が用いられているという理由で，“bhavati” などの動詞でも bhāvanā が理解されることになる。

Kumārila は AB 両方の立場を詳しく説明し，彼自身がいずれの立場を採用するかは述べていない。つまり，相容れない面のある両説が同じ資格で並べられているわけで，このことが TV の議論を複雑にし，まとまりを欠くものにしているように思われるのである。

もちろん，Kumārila が両説を等しく容認していたと見做せるわけであるが，何故このような事態が生じたのであろうか。

IV. まず ŚV を検討してみると，vākyādhikaraṇa 章における反論者の主張が注目される[4)]。この論者が批判しようとしている Mīmāṃsaka の教説は，動詞語尾が bhāvanā を表示するというものなのである。これに対し，Kumārila は先述の主張をしているのであるから，次の二点が想定できよう。

(1) 当時の Mīmāṃsā 学派では，語尾表示説が有力なものだつたのではないか。

(2) Kumārila 自身は，表示部分を特定するのに消極的であつた。

そして，もう一度 TV の記述を調べてみると，やはりこの二点が確認される。

すなわち TV においても，bhāvanā の論証が行われるきつかけとなつた，反論者の問題提起は，次に挙げるように語尾表示説に向けられたものだつたのである。

> TV, p. 340, *ll.* 9–10; kathaṃ punar yajyādīn pṛthakkṛtya kevalapratyayavācya eva bhāvanārtho labhyate bhāvayed iti/

また表示部分に関する AB 両説の論述に先立つて Kumārila は bhāvanā の証明を行うが，その際 “bhavati” などの動詞に bhāvanā を認めることに反対していたことを忘れてはならない。そうすると，これらの動詞に bhāvanā を認めない A 説の接続は納得し得るのに反し，bhāvanā の表示を認める B 説をただちに Kumārila の自説と見做すのは困難であろう。

そして B 説の書き出しは次のようになつている。

> TV, p. 347, *l.* 3; śāstre tu sarvatra pratyayārtho bhāvaneti vyavahāraḥ/

B 説の接続が困難であるとすれば，この一文は，B 説が Kumārila の自説と異なるものであることの断わり書きと考えられる。また，語尾表示説が少数者のものではなく，śāstra に関しては一般的なものであつたことも窺えよう。

この śāstra が何を指すのか明らかではないが，TV の他の箇所の記述などか

ら，Veda の教令およびそれに関連する教示を指すようである[5]。

なお ŚBh ad JS II. 2. 1 には，bhāvanā が語尾によつて表示されることを明瞭に述べた部分があるが[6]，この箇所の TV において，Kumārila は語尾表示の問題には一切触れていない。

したがつて，先に挙げた二点は ŚV のみならず TV にも該当すると言えるだろう。語尾表示説も，儀軌を解釈するうえで，Kumārila が異論を唱えなければならないものではなく，またおそらくは当時有力な見解であつたがために，AB 両説が等しく並べられたものと思われる。

V. このように Kumārila の基本的な立場は，bhāvanā の表示個所の特定には消極的なものであつたが，語尾表示説の前にしばしば動揺を見せている。

(1) 最初の問題箇所は，bhāvanā の議論の冒頭部である。まず，Kumārila は動詞 (ākhyāta) から動詞語根の意味 (dhātvartha) とそれに染められた (anuraktā) bhāvanā とが理解されると述べている[7]。一連の議論の後，語尾表示説に対して反論が提出される (前出)。答弁の冒頭で次のような偈文が示される。

siddhakartṛkriyāvāciny ākhyātapratyaye sati/
sāmānādhikaraṇyena karotyartho'vagamyate// (TV, p. 341, *ll.* 14–15)

Kumārila は動詞を二種に分類するが，ここでは "karoti" という語の意味をもつ動詞が取り上げられている。そして siddhakartṛkriyā＝karotyartha(＝bhāvanā) が意図されているのであるが，注目すべきは語尾表示説が採られていることである。また，この偈文に続く散文部では，"bhavati" という語の意味をもつ動詞が取り上げられ，語尾の表示する作用として，kartrātmalabdhamātra-vyāpāra が言及されている。こちらの作用も bhāvanā と見做されるか否かについては明示されていないが，とにかく先述のBの立場を思わせるものである。

ところが，実際に指示対象の同一性 (sāmānādhikaraṇya) を用いての証明が始まると，語尾表示の立場はすつかり影をひそめてしまい，次のような結論が出される。内容的には先の偈文に対応しているはずのものである。

TV, p. 342, *ll.* 7–8; tasmāl labdhātmakakartṛvyāpāravacanāni karotyarthavanty *ākhyātāni*/

さらに，karoti と bhavati の関係が考察され，karotyartha＝bhāvayatyartha＝bhāvanā が述べられて，bhāvanā の証明が終了する。

TV, p. 344, *ll.* 3–5; evaṃ karotyarthadvāreṇa sarv*ākhyāteṣu* bhāvayatyarthaḥ siddhaḥ/

tena bhūtiṣu kartṛtvaṃ pratipannasya vastunaḥ/
prayojakakriyāṃ āhur bhāvanāṃ bhāvanāvidaḥ//

このように見てくると，先の偈文での語尾表示への言及は，全体の論調からはみ出しているような印象を受ける。おそらく，語尾表示説へ向けられた批判に対し，最初 Kumārila は語尾表示説に立つて bhāvanā を証明しようとしたのであろう。しかし論証の過程でそれは撤回されてしまつたのである[8]。

(2) 第二の問題箇所は，bhāvanā の三要素のうち sādhya を確定する部分，およびそれの派生的な問題である自動詞 (akarmaka) と他動詞 (sakarmaka) をめぐる部分である[9]。ここでは明らかに語尾表示説が採られている。しかしここで論じられている問題は，bhāvanā の論証部分で見られた動詞一般の考察ではなく，儀軌の解釈に関連するものであることを忘れてはならない。つまり śāstra の領域内の問題なのであり，語尾表示説が採られているのも頷けよう。

なお ŚV にも三要素の議論があるが，語尾表示説が採られているかどうかは断定しがたい[10]。

VI. 以上のように，bhāvanā 説は既に Kumārila 以前に存在し，語尾表示説が有力なものとなつていたが，このような bhāvanā 説は，あくまで儀軌解釈の範囲内のものであつたに相違ない。Kumārila が動詞一般の問題として bhāvanā の論証を試みたのは，そういう状況下であつた。だが，表示部分に関して彼の到達した結論は，従来の説と合致するものでなかつた。彼自身はその理由として，表示部分を特定することの困難さ，および ŚV と同様に特定することの無意味さを挙げている[11]。また，"bhavati" などの動詞に bhāvanā を認めたくなかつたこともその理由であると考えられる。しかしながら，三要素説などの儀軌の問題に直面した時，彼は既にその領域で確立していた語尾表示説に立つたのである。

このような一貫しない態度は，後代の Bhaṭṭa 派の学匠達に混乱を招いた。例えば Pārthasārathi は ŚD ad JS II. 1, 1 において，最初は語尾表示説に立つて話を進めている。当時は語尾表示説が支配的だつたのであろう。ところが TV から次の一偈を引用した後は，ākhyāta から理解されるとする立場に変わつている[12]。

abhidhābhāvanām āhur anyām eva liṅādayaḥ/
arthātmabhāvanā tv anyā sarvākhyāteṣu gamyate// (TV, p. 344, *ll.* 8–9)

これは，abhidhābhāvanā (AS では śābdī bhāvanā) と arthātmabhāvanā (AS では ārthī bhāvanā) とが，例えば "yajeta" という動詞から同時に知られること

を述べた有名なものであるが，この偈は bhāvanā の証明の直後に出てくるもので，文中の "ākhyāta" の語に「動詞の語尾」という意味を予想する必然性はない。結局 Pārthasārathi は，この偈文の字句にふりまわされているのである。

さて，最初に触れた AS に話を戻すと，ŚD と同じ混乱があるようである[13]。この混乱の生まれた背景はいろいろと想定できようが，いずれにしても AS の記述は二つの立場の折衷であり，それを余儀なくさせたものは Kumārila の bhāvanā 説なのである。（了）

〈使用テキストおよび略号〉

AS: Arthasaṃgraha of Laugākṣi Bhāskara, BenSS 2, 1882.

MNP: Mīmāṃsānyāyaprakāśa of Āpadeva, edited and translated by Franklin Edgerton, New Haven, 1929.

ŚBh: Śabarabhāṣya, ĀnSS 97 (Mīmāṃsā-darśana) in 7 parts, 1970–76.

ŚD: Śāstradīpikā of Pārthasārathi, Vol. 2, edited by Subrahmanya Sastry, 1975.

ŚV: Ślokavārttika of Kumārila, ChSS 11, 1898–99.

TV: Tantravārttika of Kumārila, see ŚBh.

1) 拙稿「Kumārila の bhāvanā 説について (1)」印仏研第 28 巻 1 号，1979 参照。

2) Cf. MNP, § 3. 本文における AS についての考察は MNP にも該当する。

3) 北川秀則「Arthasaṃgraha の和訳解説 I」名古屋大学文学部研究論集 XLVIII, 1968, p. 8. ただし下線は筆者。　4) Cf. ŚV, vākyādhikaraṇa, kk. 77–80ab.

5) Cf. TV, p. 351, *l.* 8; yatra śāstrādhīnā puruṣapravṛttis..... また ŚV, śabda, k. 12cd; codanā copadeśaś ca śāstram evety udāhṛtam.

6) Cf. ŚBh ad JS II. 2. 1, p. 7, *l.* 5–p. 8, *l.* 2.　7) Cf. TV, p. 339, *ll.* 8–13.

8) 論証の過程では "ākhyāta" "sarvākhyāta" という語が用いられている（本文引用の TV 参照）が，文脈上 "bhavati" などの動詞は除外されると考えなくてはならない。"kiṃ karoti" という質問の答えになり得る「すべての動詞」の意であろう。Frauwallner は文字通り「すべての動詞」と理解しているが，正しくないと思う。cf. E. Frauwallner, Bhāvanā und Vidhiḥ bei Maṇḍanamiśra, WZKM, Bd. 45, p. 223.

9) Cf. TV, p. 350, *l.* 14–p. 351, *l.* 19 および TV, p. 352, *l.* 5–p. 353, *l.* 7.

10) Cf. ŚV, vākyādhikaraṇa, kk. 251–276. ただし，少し後の k. 298cd では語尾表示説が見られる。　11) Cf. TV, p. 345, *ll.* 12–19.

12) ŚD, p. 72, *l.* 2 および *l.* 7 では，bhāvanā を pratyayaの表示対象と明記。*ll.* 19–20 で偈文引用。p. 73 では 8 箇所で ākhyāta の表示対象とされ，p. 74 で再び pratyaya の表示対象とされる。

13) AS の他の箇所では，二つの立場が混在している。① ākhyāta が表示する——p. 3, *l.* 4, p. 6 *l.* 7 etc. ② pratyaya が表示する——p. 2, *l.* 17, p. 21, *l.* 18 etc.
MNP も同様である。① ākhyāta が表示する——§ 75, 80, 123, 323, 383 etc. ② pratyaya が表示する——§ 13, 14, 19 etc.

（京都大学大学院）